

海外レポート Germany 中田千穂子

北ドイツ・ノイシュトレーリッツ市の
メクレンブルク州立劇場

A・ジーガート演出「さまよえるオランダ人」と
「マクロプロス事件」プルミエ

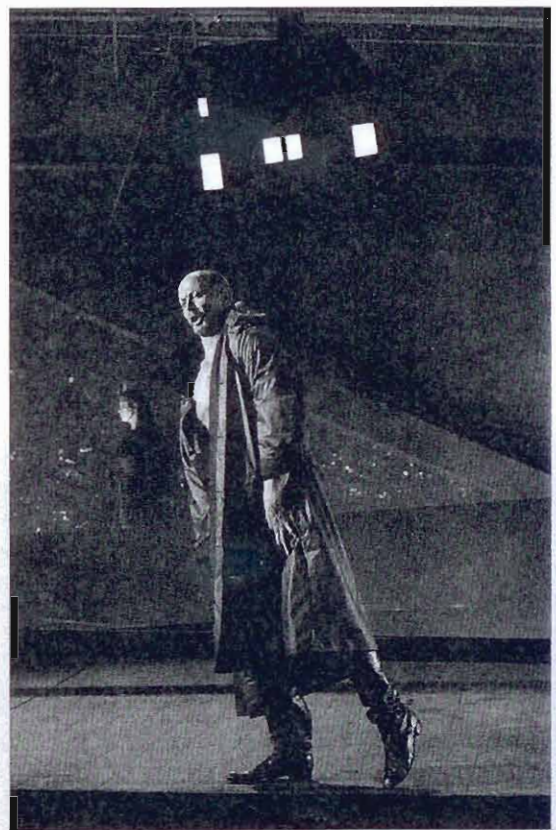
北ドイツ・ノイシュトレーリッツ市の
メクレンブルク州立劇場
Landestheater Neustrelitz

かつて居城都市であったノイシュ
トレーリッツ市のオペラ座は東独時
代に再建され、今はメクレンブルク
州立劇場と名付けられている。6月
4日、このオペラ座がポーランドに
招かれ、ソポトの有名な野外劇場
「森のオペラ」でアリラ・ジーガー
ト演出の「さまよえるオランダ人」
を上演し、3750人の観衆から拍
手喝采を浴びた。「森のオペラ」は

1909年に開かれ、1922年か
らリヒャルト・ワーグナーのオペラ
のみ上演される様になり、ナチ時代
にはエーリッヒ・クライバー指揮で
大変質の高い上演が行われたり、ソ
ポトは“北のバイロイト”と呼ばれ
る様になった。

アリラ・ジーガート演出
ワーグナーの
「さまよえるオランダ人」

ワーグナーの「さまよえるオラン
ダ人」のA・ジーガート演出は、昨
年のオペラ・ヴェルトの批評家アン



「さまよえるオランダ人」
オランダ人 (M.Junge) とゼンタ (L.Molnarova)
(©Joerg Metzner)

ケートで“年の演出家”にノミネー
トされた程、論理的で明瞭かつ緊張
感のある素晴らしい演出である(2
008年1月21日所見)。初稿によ
り全3幕通して上演された。3人の
運命の女神がしばしば舞台上に現れて
綱を張る。オランダ人とゼンタの関
係は、トリスタンとイゾルデの様に
二人の間に抗し難い吸引力が作用
し、互いの動きを制御出来ない。こ
の宿命的な瞬間がワーグナーの場合
エネルギーの原動力となる。この原
動力を3人の運命の女神が体现する
のである。とは言えA・ジーガート
はミュトスを物語るのではなく、身
近なテーマとして心理的に明白に物
語っている。おしまいはメタファア
として、二人は宿命を一緒に背負っ
て旅立つのである。ハンス・デー
ター・シールの舞台は、床や斜めの
黒い壁を幾何学的にアレンジしたシ
ンプルでメルヘン的な舞台であり、
ワーグナーの意図を明確に読み取ら
せる。マリー・ルイーゼ・シュトラ
ントの衣装もズック袋にレイン・コ
ートのオランダ人の姿は永遠にさま
よえる人に相応しい。新ブランデン
ブルク交響楽団のシェフ、シュテフ

アン・マルツェヴの指揮は序曲は少々無味乾燥な演奏であったが、第1幕に入ってから激しい嵐や荒れた海のうねりが劇的に描かれ、ムジータターが大きく盛り上げられる。ゼンタのパラードではラリサ・モルナロヴァが綱を張りながらドラマティックな声で歌い頂点に達した。第3幕で水夫たちが床を強く踏みならして歌う合唱からも感動が得られた。終演後聴衆から満場一致で拍手喝采が浴びせられたのだった。

アリラ・ジーガート演出

ヤナーチェクの

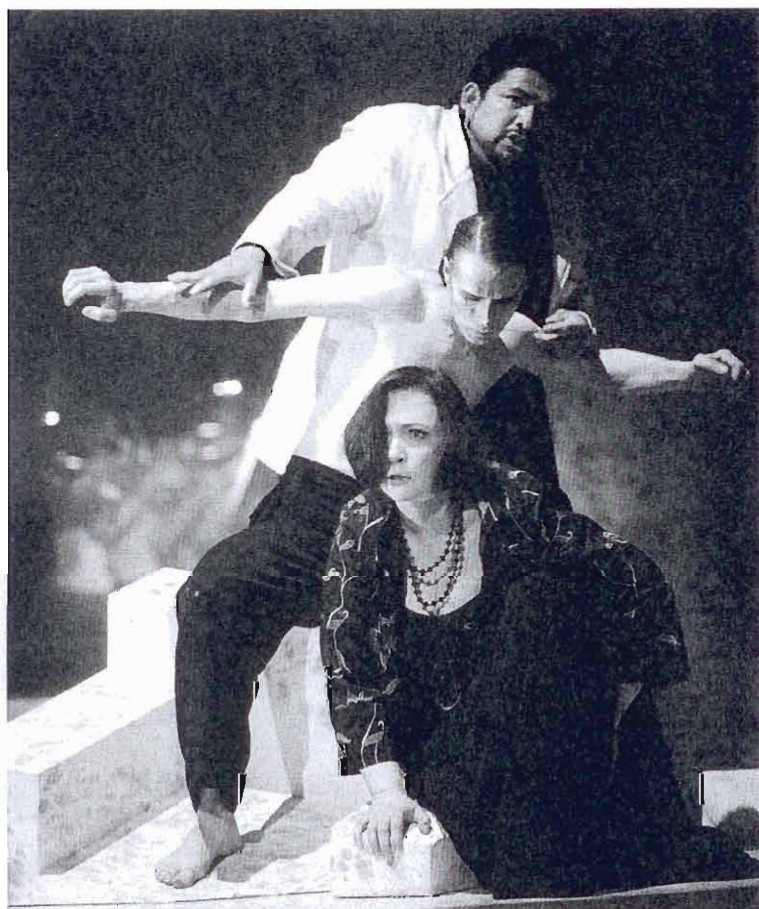
「マクロプロス事件」プルミエ

ヤナーチェクのオペラ「マクロプロス事件」も大変要求の高いオペラであるが、地方の人々が偉大な芸術を身近に体験出来る事は素晴らしい事である。刑事犯罪学的、サイエンス・フィクション的、グロテスクで風刺的なこのオペラがA・ジーガート新演出により上演され聴衆から熱狂的な喝采が浴びせられた。今回の舞台もH・D・シャールによるもので、ランベの書棚や床に直方体の書類の箱が所狭しと置かれている画一舞台。ベルリンのホロコースト記念

碑が想起される。主人公エミリア・マルテイの337年間の生涯の形跡と傷跡であると同時に平和と安全への人間の祈願と憧憬が象徴的に表されている。序曲ではアンサンブル全員が一本の鉄棒にぶら下がって走り出す。優れた表現舞踊家でコリオグラフィでもあるA・ジーガートに取って身振り言葉の表現が演劇的な行動の起点となる。一人のダンサーが舞台上に登場して常に我々の側に存在する死の象徴（優雅で深みある表現のズエレン・スワート）を演じる。死はエミリアを愛して居りアルベルト・グレゴールの前に立ちほだかつてマルティを庇う（写真）。時折死の象徴が針の無い大きな時計を転がし永遠の生を永遠の死へ導く。ショウダウンは第3幕でエミリアが皆の前でグロテスクな真実を告白する場面。お仕舞いに皆で合唱し各自がこの作品の核心である“人間の欲望”を認識する中に幕となる。ラリサ・モルナロヴァがニュアンス豊かな声で愛に疲れたエミリア・マルテ

ィを好演。メキシコのテノールのフランチスコ・アルマザが遺産相続に躍起となるグレゴールを熱演したが歌唱は力み過ぎ。バリトンのミカエル・ユンゲが力強い声で抜け目の無い訴訟相手のヤロスラヴ・ブルスを好演。ハウク・シェンドルフを演じたシグルド・カルネツキーのコメディアンの演技が光る。

大編成のオーケストラはガイゼの幕の向こうの舞台奥に配置された。新ブフンデンブルク交響楽団のシェフのシユテファン・マルツェヴ指揮の演奏は、常に音色豊かな透明感のある音で演奏され決して歌手の声が消される事は無かった。終演後熱狂的な喝采が続いた。（5月17日、州立劇場ノイシュトレリッツプルミエ所見）



エミリア：L.Molnarova、死の象徴：S.Swart、グレゴール：F.Almaza
(©Joerg Metzner)